

或る農業研究員の 放浪記 (4)

さすらいの研究員

第4話 終戦から80年、谷田部・観音台の先史 1

今年の8月15日で終戦から80年となります。第二次世界大戦というと、東京大空襲や沖縄戦、広島・長崎の原爆被害などの出来事が取り上げられることが多いです。しかし、農研機構が立地する足元のつくば、谷田部・観音台の地も戦争に深く関わっていました。今回は、タイムトラベルをして、この地における戦争の記憶の旅に出たいと思います。

すこし長くなってしまったので、2編に分けて今回は前編をお届けしたいと思います。

谷田部飛行場と観音台

農研機構の多くの研究部門が集まっているつくば市観音台の地理的な形成には、戦前における海軍の飛行場の建設が密接に関わっています。この飛行場の建設について茨城県史¹⁾には「昭和7年、谷田部町と小野川村の東南端境界一帯を占める広大な平地林がきりひらかれて、「谷田部飛行場」が設置された」と書かれています。その時こそ、それまで土地利用の多くが平地林であった現在の観音台の地が開かれた瞬間です。なお、谷田部飛行場の開設により敷地内にあった布袋（ぼで）集落は東側に移転することになりました。

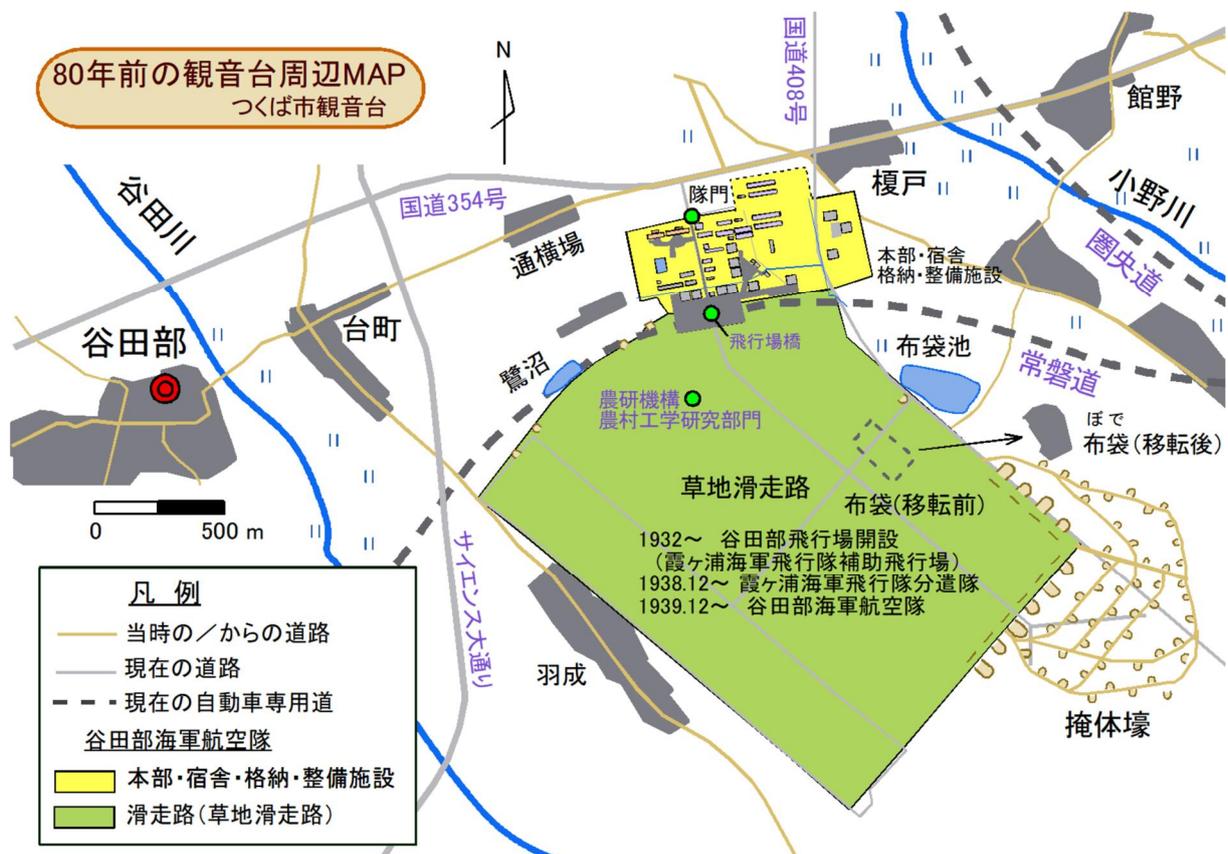


図1 80年前の観音台周辺MAP

図1をごらんください。国道354号（野田線）から学園病院や農林団地方向に入る道が、谷田部飛行場の正門（隊門）に続く道で、この当時に開かれた道です。飛行場の隊門は、現在の関東鉄道バス谷田部車庫と筑波学園病院の間にある交差点付近にありました。この道をまっすぐ南の方向に進むと、常磐自動車道を渡る橋があります。ご存じの方も多いと思いますが、この橋は「飛行場橋」と命名されています（写真1）。橋を渡るとこの道は少し左にカーブして、農研機構の研究部門を両側に見ながら、1.2 kmほど直進して左手に農業環境研究部門の本館を見て少し通り過ぎたところに稲荷川をわたる橋があります。この橋の向こう側は実験施設と試験圃場です。先ほどの飛行場橋のあたりからこの稲荷川の橋までが当時の滑走路の範囲です。滑走路といっても、羽田空港や成田空港にあるような舗装された滑走路ではなく、草地滑走路と呼ばれる未舗装の簡易な滑走路でした（図2）。草地滑走路の大きさは、1,800×1,300 mで滑走路の東西（北東－南西）の範囲はおおよそ現在の国道408号線から観音台、若葉の範囲までです。



写真1 飛行場橋



図2 草地滑走路を離陸する零戦（イメージ）

草地滑走路を採用する利点は、まず整備費が安上がりなことです。舗装にかかる経費は莫大です。これはいうまでもありませんね。そして、第二には、草地滑走路では着陸時の衝撃が緩和されるので初心者向けの訓練に適していることが挙げられます。もし着陸に失敗してもダメージが小さいのです。付け加えると、過酷な戦地では整備された滑走路がないこともあり、戦地を想定した実践的訓練にもなりました。さらに、草地滑走路では、風向きに応じて柔軟に滑走方向を選ぶことができるというメリットもありました。

ただし、草地滑走路にはデメリットもあります。それは、重量の大きい飛行機の離着陸に制限があることです。当初の谷田部飛行場は、初等訓練に使用する九三式中間練習機（自重1 t）など軽量の単発プロペラ機が中心だったのですが、大戦末期になると戦闘機の実戦訓練施設に転換されました。これにより、機体重量が約2 tの零式艦上戦闘機（零戦）や約3 tの局地戦闘機「紫電」などが配置されました。そのため草地滑走路には、地盤の強度や水は

け、平坦性の確保、除草などが求められていたものと思われます。それでも零戦はもともと空母での運用が前提だったため、例えば離陸滑走距離は200 m程度と離着陸性能が優れており柔らかい地面でも比較的安定して運用できました。ただし、注意して着陸しないと芝生の滑走路はでこぼこしているのです、飛行機の脚を曲げたり折ったりしたそうです²⁾。そのため求められる滑走路の整備水準がより高かったのです。ご存じのとおり、このあたりの土壌は水を含むとぐちゃぐちゃになる火山灰土壌「黒ボク土」なので特に雨天時や豪雨後などの滑走路の路面の整備や管理には気をつかったと考えられます。草地滑走路の一部では転圧や碎石の敷設などで強化した可能性もあります。また、格納庫前のエプロンにあたる現在の常磐道の側道周辺が戦闘機用の滑走路であったという記述³⁾もみられますが、当時の複数の戦闘機の搭乗員が谷田部は草地滑走路のみであったと証言している²⁾ことから、エプロンや誘導路部分の滑走路としての利用は、もしあったとしても限定的だったと考えられます。

ここで稻荷川の橋に戻ると、ここから先は、所有する飛行機を空爆の被害から守る掩体壕（えんたいごう）という施設が広がっていたところです。一般に掩体壕には2種類あって、ひとつは有蓋（ゆうがい）掩体壕と呼ばれるコンクリート造りで上部も覆われた施設で、一般に掩体壕というところを思い浮かべる人が多いかもしれません。もうひとつは、無蓋（むがい）掩体壕という屋根がなく土盛りで造られた簡易なタイプの掩体壕（図3）です。谷田部にあったのは主にこのタイプでした。谷田部には小型の無蓋掩体壕が約50基、草地滑走路に面しており爆風除けとセットになった中型の無蓋掩体壕が10基が存在し、加えて書類上では有蓋掩体壕が10基ないしは20基程度あった⁴⁾ことになっています。しかし、この有蓋掩体壕は1946年2月に撮影された空中写真⁶⁾をみても肉眼で確認できません。したがって、有蓋掩体壕は建設途上かもしくは計画中だった可能性があります。無蓋掩体壕は、本格的な建設技術や資材を必要とせず、短期間で建設できます。そのため、百里原航空隊（現 茨城空港）では、掩体壕が地元住民の勤労働員により建設されたそうです³⁾。記録は見当たりませんが谷田部でも掩体壕の建設に地元住民の勤労奉仕があったかもしれませんね。飛行場の建設には、「農村恐慌後の沈滞した谷田部地方に一種の軍需景気をもたらした」側面もありましたが、一方で「（飛行場の）整備工事が進められると、谷田部地方の人々は、勤労奉仕の名のもとに「軍事動員」を強制的に課せられ（た）」⁷⁾とも記録されています。

図3 むがいえんたいごう
無蓋掩体壕
(イメージ)

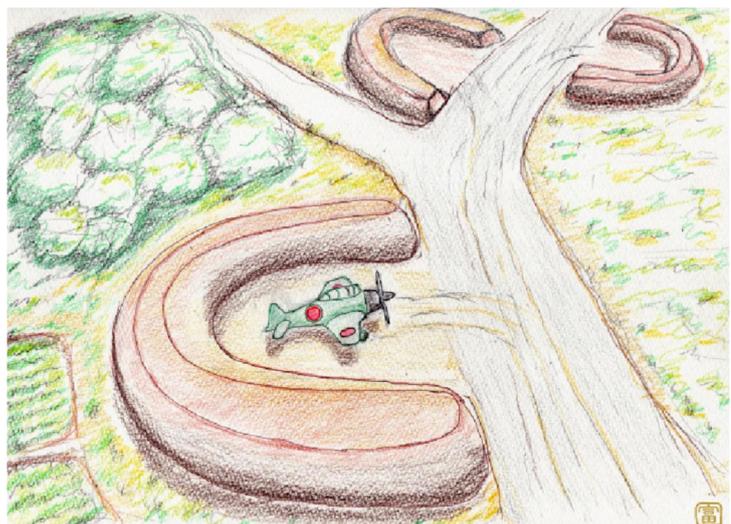


表1 谷田部飛行場とその周辺の出来事

	谷田部飛行場と周辺での出来事	その他の情勢
1932 (S7)	霞ヶ浦海軍航空隊の補助飛行場として谷田部飛行場が開設。 主力機種 ⁷⁾ : 九〇式機上作業練習機, 九三式中間練習機	
1938.5 (S13)	飛行場と建物区域の拡張工事 ⁸⁾	
1938.12.15	霞ヶ浦航空隊・谷田部分遣隊の設置される。予科練の霞ヶ浦航空隊と連動して練習機専修の分遣隊となる。	
1939.12.1 (S14)	霞ヶ浦航空隊から独立し谷田部航空隊となる。	
1941.8	増備工事が概ね完成, 居住施設: 930名, 格納庫: 5200 m ² , 使用機: 中練 ⁹⁾	
1941.12.8 (S16)		日米開戦
1942.6 (S17)		ミッドウェー海戦の“敗北により日本は制空権と制海権を失い, 戦争の主導権が米国に移る” ⁷⁾ .
1942.12	予科練卒業生受け入れ開始	
1944.6 (S19)		マリアナ沖海戦により“連合艦隊は壊滅的な敗北”を喫する ⁷⁾ . これにより空母と多くの艦載機, 熟練搭乗員を一挙に失ったため, 搭乗員の大量養成が急務となる。
1944.7	甲飛 13 期 (予科練卒業生) 500 名が大量入隊 ⁷⁾	
1944.10		レイテ沖海戦により“日本海軍は事実上消滅” ⁷⁾ . これ以降, 「空母」による航空戦の継続が不可能となり, 「基地航空隊」に重心が移る。
1944.12.5	初等飛行訓練を担う航空隊が神町に移り, 谷田部には神之池の艦上戦闘機実用機教程が移る。これにより谷田部は艦戦実用機教程の練習航空隊となり, 零戦などの戦闘機が配備される。定数戦闘機 180 機 ⁷⁾ .	
1944.12.末頃	訓練生は合計三百数十名程度, その他, 教官や教員が所属 ¹⁰⁾ .	
1945.2.10, 2.16 (S20)	関東に B-29 襲来. 迎撃に協力 ^{7),10)} .	
1945.2.20	特攻隊への参加希望調査 ^{10),11)}	
1945.3.1	本土所在の練習航空隊で第 10 航空艦隊を編成し戦力化が図られる ^{7),9)} .	
1945.3.10	東京大空襲に出撃した B29 が谷田部基地の南南西約 6 km (つくばみらい市狸穴) に墜落 ^{10),13)}	東京大空襲
1945.3.26~		3.26 米軍 慶良間諸島上陸, 4.1 米軍 沖縄本島上陸
1945.3.30~	谷田部航空隊の戦闘機隊(零戦 13 機)が九州の富高基地, 出水基地に進出。4 月より沖縄方面航空作戦に従事 ¹³⁾	筑波空と連動
1945.4.7	特攻隊出動命令が来る。第一陣 20 名が出撃基地の鹿屋基地に向けて出発 ¹⁰⁾	
1945.4.12~	神風攻撃隊を「昭和隊」と命名 特攻隊昭和部隊 54 名 (戦死 40 名, 生存 14 名)	
1945.5.5	第 10 航空艦隊直属となる。これにより谷田部を含む練習航空隊はさらに実戦部隊化が進む。練成中の紫電 18 機と要員は筑波航空隊へ	
1945.5 中	空襲が増える。掩体壕の設置を進める。また, 壊れた飛行機などがデコイ(おとり)として飛行場に並べられる ¹⁰⁾ .	
1945.5~6	緊急として 2 ヶ月間で戦闘機の搭乗員を養成。	
1945.6.10		阿見大空襲. 被害を受けた土浦海軍航空隊の予科練生が翌日谷田部に転属となる ¹⁴⁾ .
1945.6~7	B29, 艦載機による爆撃が激しさを増す ¹⁰⁾ .	7.10 米軍の本土上陸に対する防衛作戦に必要な航空兵力の維持のため, 飛行機と搭乗員の温存策へ
1945.8.13	谷田部航空隊に空襲 ¹⁵⁾	
1945.8.15		ポツダム宣言の受諾・日本の無条件降伏
1945.8.20	8.19 までは飛行機が飛んでいたが, 8.20 以降は飛行禁止 ²⁾ .	
1945.8.22	海軍司令部より指揮下各部隊の作戦任務を解除する命令。翌日から解隊 ¹⁰⁾	
1945.10.下	谷田部飛行場の最後の飛行 ²⁾	
谷田部海軍航空隊 ⁵⁾ (1945.8 調べ)	S20.8 時点: 飛行場: 1,800×1,300 (m) 芝張, 430,822 坪, 主任務: 教育, 掩体壕: 中 10(無蓋), 小 52(無蓋), 小 20(有蓋)? 収容施設: 士官 176 名, 兵員 3,400 名, 格納庫: 中練 9 隊分 施設: 居住, 指揮所, 通信所, 爆弾庫, 燃料庫, 倉庫	

谷田部飛行場の開設から終戦まで

飛行場の歴史を年表にまとめました(表 1)。谷田部飛行場は、1932年に霞ヶ浦海軍航空隊（以下、霞ヶ浦航空隊）の補助飛行場として設置されたもので、主に初等飛行訓練を行うことを目的とした軍事施設でした。その後、1938年に谷田部飛行場には霞ヶ浦航空隊の分遣隊が設置され、翌1939年12月には霞ヶ浦航空隊から独立し、谷田部海軍航空隊（以下、谷田部航空隊、以下では航空隊名から「海軍」を省略）となりました。特に開設当初から大戦末期の1944年12月初旬までは初等飛行訓練を受ける搭乗員候補生らがはじめて実機で飛ぶ場所でした。谷田部航空隊の飛練（飛行術練習生）の訓練の厳しさには定評があり「飛練谷田部は鬼より怖い」、「鬼の谷田部に蛇の筑波」などと恐れられていたそうです¹⁶⁾。初等飛行訓練を担った1944年12月の初めまでの谷田部航空隊には「赤とんぼ」と呼ばれた燈色の練習機（図4）が配備されていました。



図4 谷田部の空を飛んだ九三式中間練習機（通称 赤とんぼ）

1939年に予科練が横須賀から阿見町にあった霞ヶ浦航空隊（1940年からは土浦航空隊）に移転してくると、谷田部航空隊も予科練の教育・訓練基地の一部として機能するようになります。ここで予科練とは、「海軍飛行予科練習生」の略で、旧海軍がより若いうちから基礎訓練を行って熟練の搭乗員を育てようと1930年（昭和5年）に始められた若年訓練過程の制度です。14歳半から17歳までの少年を全国から試験で選抜して搭乗員としての訓練を行うものでした。予科練には終戦までの15年間で約24万人が入隊して、このうち約2万4千人が後に戦地に赴いたとのこと。そして内約1万9千人が戦死しました¹⁷⁾。

その後、日米開戦とその戦局の悪化に伴って、搭乗員の大量養成を担うとともに徐々に実戦部隊としての機能を持つようになります。1944年12月には初等訓練を山形県に新設され

た神町航空隊に移し、特攻隊の訓練のため手一杯になっていた神之池（ごうのいけ）航空隊（現、鹿島市と神栖市の一部）から実用機の訓練過程が移動してきました。これにより零戦（表2）を主体とする戦闘機が配備されました。このころになると、実戦的任務も担うこととなり敵機の来襲に対して谷田部航空隊からも迎撃に出るようになりました。零戦を主体とする戦闘機により構成された制空隊（1945年2月末頃で約35名が所属）¹⁰は、敵の航空機に対する邀撃（ようげき）や制空権の確保を行いました。その役割は、本格的な制空部隊であった厚木（神奈川県）や百里原（現在の茨城空港）の航空隊と比べると限定的でしたが、関東防空戦における重要な補助基地・支援拠点として機能しました。

表2 零戦（零式艦上戦闘機）の諸元（*52型の場合）

項目	内容	項目	内容
初飛行	1939年4月1日	乗員	1名
製造	中島飛行機、三菱重工業	エンジン	中島栄21型* / 空冷星形14気筒
製造機数	10,430機	排気量/馬力	27,877 cc / 1,100馬力
全長×全幅	9.1 m×11 m*	燃料タンク	525 L(内部) + 330 L(増槽タンク)
重量	自重 1876 kg*, 正規全備重量 2607 kg*	航続距離 (参考)	2,375 km (増槽ありの場合)
最高速度	565 km/h*	燃費(参考)	巡航時 3.0 km/L, 戦闘中 0.5 km/L 以下?
移動時間(参考)	谷田部→鹿屋（鹿児島県）約4時間（ただし、ルート、装備品の有無、増槽の有無、気象条件などで異なる）		

1945年3月に米軍が沖縄・慶良間諸島に上陸すると、その対応のため谷田部航空隊は筑波航空隊（友部町）と共に戦闘機部隊を九州に派遣し、沖縄方面における航空支援に向かっています¹²。また、これに先立つ2月20日には谷田部航空隊において神風特別攻撃隊（特攻隊）50名の募集が行われ、54名の隊員が選ばれました¹¹。すでに茨城県内の近隣の航空隊（土浦航空隊など）からは1944年10月以降特攻隊が派遣されていました。そのようななかで、谷田部航空隊への特攻隊の出撃命令は1945年4月7日に届き、同日、早くもその第1陣が前線基地となっている鹿児島県の鹿屋に向けて出発しています¹⁰。谷田部航空隊の54名の昭和隊の隊員は、4月14日に10名、4月16日に9名、4月29日に8名、5月11日に8名、6月22日に2名が出撃、その他に3名が戦死し、合計40名の隊員が落命しています¹¹。また、特攻兵器のひとつである「桜花」（おうか）の実験・訓練部隊であった第七二一航空隊は、一時、本拠地を谷田部に移しましたが、その後を継いだ第七二二航空隊（通称：竜巻部隊）が桜花の錬成部隊として谷田部で訓練を行いました。竜巻部隊の名称は、谷田部飛行場内にあった「竜巻山」に由来するものです⁷。

大戦末期には、本土決戦に向けて谷田部航空隊における最後の特攻隊「神誅隊」（しんちゅうたい）が編成されました。谷田部航空隊では、5月から6月の2ヶ月間、朝鮮半島の元山（げんざん）航空隊とともに、緊急で戦闘機の搭乗員の養成が行われましたが、修了後の7.1には訓練生全員が「神誅隊」に配属されました²。しかし、この時期になると谷田部は頻繁な空襲に見舞われ思うように訓練できなくなっていたので、特攻訓練は場所を千歳（北海道）に移して続けられました。そのうちの一部の隊員（10名程度）は8月中旬に特攻隊の訓練基地だった観音寺航空隊（香川県）に異動が命じられましたが、陸路での移動途中で終戦を迎えたそうです²。

一方、谷田部では使用できる戦闘機も少なくなり、また、米軍の本土上陸に対する防衛作戦、いわゆる「本土決戦」に備えるため、飛行機と搭乗員の温存策が取られることになりました。HP「思い出の記」によると、使用できる飛行機は飛行場から離れた雑木林に隠し、1日2回程度、目立たないように試運転を実施したり、訓練もまばらに行われる程度となっていました。また、1945年8月6日の広島への原爆投下後は、搭乗員も飛行場から退避するよう命令を受け、空襲警報が出るとトラックで森の中に退避するような状況だったそうです。そして、そのまま終戦を迎えました。

なお、谷田部飛行場から最後の飛行機が飛び立ったのは1945年10月23日、もしくは24日のことです。米軍が接收する零戦4機を横須賀に空輸するために、谷田部飛行場を離陸したのが最後の飛行となりました²⁾。

(次回に続く)

参考資料

- 1) 茨城県史編さん総合部会 (1975) 茨城県史 市町村編II
 - 2) 茨城県立つくば工科高等学校放送委員会 (2007) 谷田部海軍航空隊の記録, DVD
 - 3) 伊藤純郎編 (2008) フィールドワーク 茨城県の戦争遺跡
 - 4) 海軍航空本部? (1945頃?) 谷田部航空隊位置図
 - 5) 海軍航空本部? (1945?) 海軍航空基地現状表(内地之部) (S20.8 調)
 - 6) 国土地理院, 地図・空中写真閲覧サービス
 - 7) Wikipedia, 「谷田部海軍航空隊」, 「零式艦上戦闘機」, 「第七二一海軍航空隊」, 「マリアナ沖海戦」, 「レイテ沖海戦」 (2025/7 閲覧)
 - 8) 海軍航空本部? (1938?) 航空隊航空基地設備計画現状表(S13)
 - 9) 海軍航空本部 (1941?) 航空基地一覧其二 (S16.8 時点)
 - 10) 「思い出の記」HP, 或る零戦乗りの青春
<https://yama.hibi.muhen.jp/archives/3086/> (2025/7 閲覧)
 - 11) 佐藤孝一 (2004) 歌集 雲の彼方に 第9版
 - 12) 吉野泰貴 (2025) 筑波海軍航空隊戦闘機隊 -蒼空へゆき去りし群像
 - 13) POW 研究会 HP, 本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士<東部軍管区 (2025/7 閲覧)
<http://www.powresearch.jp/jp/archive/pilot/tobu.html>
 - 14) 朝倉篤郎 (2020) 私の戦争体験, 新聞「農民」(2020.9.7 付)
<https://www.nouminren.ne.jp/old/shinbun/202009/2020090711.htm> (2025/7 閲覧)
 - 15) 谷田部の歴史編さん委員会 (1975) 谷田部の歴史
 - 16) 「蒼空の果てに」HP, <http://www.warbirds.jp/senri/04yatabe/yatabe1.html> (2025/7 閲覧)
 - 17) 予科練平和記念館 HP <https://www.yokaren-heiwa.jp/> (2025/7 閲覧)
- *本文中のイラストは著者によるものです。